

# 焼酎粕を活用した 液体飼料給与システムの 実験・実証への取り組み

飼料費が高騰している昨今、農場における飼料費低減策は国内畜産経営の課題である。今回は、焼酎粕を利用した液体飼料給与（リキッドフィーディング）システムを導入し、離乳・肥育成績の改善を図り、さらには飼料代抑制にもつなげた好例を紹介する。

## システム導入のきっかけは 飼料費低減策

平成19年に穀物の世界的需給バランスがエタノール需要の増加などにより逼迫し、飼料費高騰が構造化・恒久化することが危惧されたため、飼料費低減策は国内畜産経営の喫緊の課題となった。

飼料費低減策の一つとして、食品残渣リサイクル法が施行され、食品循環資源の再生利用などが促進されているが、養豚では豚肉の品質問題、安定した飼料原料として食品残渣の

確保等の大きな課題があり、中々進まないのが現状であった。

しかし、北部九州においては「リキッドフィーディングシステム」と極めて相性がよいとされる焼酎粕の発生が南九州に次いで多い。そこで、生産成績向上と未利用資源の活用も図れる画期的な生産システムである「リキッドフィーディングシステム」の導入を進めた。

## 試行錯誤の末、 離乳・肥育成績ともに改善

総事業費は1億3000万円。食

品残渣を飼料化するエコフィード関連事業の補助事業を活用し、平成21年4月に完成した。「リキッドフィーディング」を実施するのは離乳後から出荷までとし、焼酎粕は\*オゾン殺菌処理を行った。

導入当初は、操作ミス・機器の不具合・適正給餌量の把握ミス・調整のミスなどによる数々のトラブルが発生し、子豚・肥育の事故が多発した。

試行錯誤の結果、離乳で6・38%（平成20年度）だった事故率は、4・30%（平成22年4月から9月）とマイナス2・08%改善。肥育においても、9・07%（平成20年度）が6・23%（平成22年4月から9月）とマイナス2・84%改善した。飼料要求率については、平成20年

度3・33から直近半年間で、2・72（焼酎粕とシロップ粕利用）と大きく改善し、肥育期間の短縮（約7日）にもなった。

## 産業廃棄物処分の認可で収益増に 餌代の抑制にも効果

1年越しの取り組みの結果、廃棄物処分の認可を受けたことにより焼酎粕を農場が有料で引き取っていたが、酒造メーカーから処理料をもたえるようになり、収益増となった。

また、同システムを導入したことで呼吸器系の疾病が減り、餌代も抑えられた。「飼料費高騰の打開策として導入に踏み切ってよかった。今後はさらなる生産性向上、未利用資源の発掘等で農場の収益を上げていく」と農場主は話す。

### DATA 事業規模

所在地：九州地方

飼養頭数：母豚 1,300頭

従業員数：16人

\*裏表紙に用語解説

## リキッドフィーディングシステム



焼酎粕専用運搬車



焼酎粕受け入れタンク



リキッドフィーディングシステム(キッチン)

### Point!

- ・焼酎粕はオゾン殺菌処理を行う
- ・コンピューター管理されたシステムで、よりきめ細かな給餌が可能

## 事故率の低下

### Point!

各豚舎ともに液餌により豚舎内の粉塵がなくなった。また、pH調整と各ステージの給餌量の調整ができるようになった



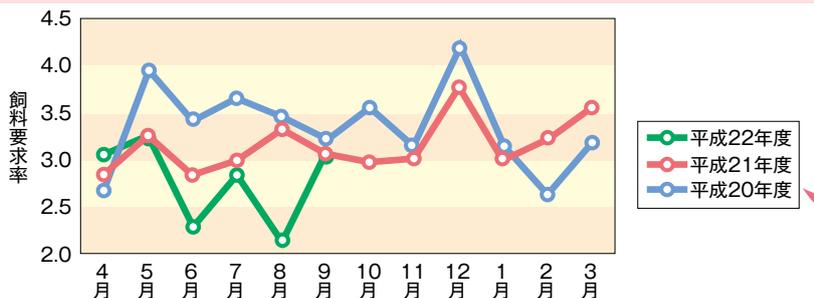
離乳舎の給餌風景



肥育舎の給餌風景

## 飼料要求率の推移

農場の直近3年間の成績



### Point!

- 飼料要求率が大幅に改善した要因として
- ・餌のごぼしがない
  - ・液餌は消化吸収がよいことが考えられる